



友の会だより №26

(2014年7月29日発行)

自転車文化センター

〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1

TEL 03-4334-7953 / FAX 03-4334-7958

Email bccask@jifu.jp

OPEN 9:30~17:00 (最終入館 16:45)

CLOSE 月曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始

『自転車文化センター夏休み教室開催』

いろいろ学んで、もっと自転車を楽しもう！

■平成26年8月9日(日)及び8月13日(水)

『自転車科学教室』

①午前10時から

■テーマ：「ギヤの大きさとペダル」

②午後2時から

■テーマ：「自転車の素材」

★対象：小学4年生～大人(定員10名)

『自転車パンク修理教室』

①午前10時45分から

②午後 2時45分から

★対象：小学4年生～大人(各回4組・定員8名)

【教室申込方法】

お申込みはメールにて行います。お名前、年齢、性別、お電話番号を記載のうえお申込み下さい。

(参加費無料)

★メールアドレス bccask@jifu.jp

定員になり次第受付は終了致します。あらかじめご了承ください。

友の会会員限定
プレゼント

17th TOUR OF JAPAN 個人総合優勝者M.ポルセイェディゴラコール選手
(ツアーズ・パトカカチ-ム/イラ)のサイン入りサイクルキャップ&サコッシュを1
名様にプレゼント!!

【応募方法】 ①〒住所／②氏名／③電話番号／④「友の会プレゼント係」と明記のうえ、メールにてご応募
下さい。(8/25締切) ※当選者の発表は、発送をもって、かえさせていただきます。

★メールアドレス bccask@jifu.jp



「子ども用自転車の歴史展」見どころトークショー

2014年8月30日(土)16時から開催されるOVE南青山主催のトークショーで、BCC谷田貝学芸員が解説をいたします。

詳細はOVEオフィシャルサイトへ <http://www.ove-web.com/event/entry-932.html>

寄贈資料の紹介

- ・ 行川様 (東京都) 優勝旗 1点 / 競輪選手登録手帳 3点 / 競輪選手会会員証 2点 / トロフィー 3点 / カスク 1点 / 優勝旗 2点 / 競輪出場あっせん通知書 4点 / 賞状・感謝状 14点 / 競輪記念ハンカチ 1点 / 競輪成績一覧表 6点
- ・ 山内様 (神奈川県) 手ぬぐい 3点 / 女学生の日記 1点 / 新撰東京名所図會 第十八編麹町区之部 / 湯呑茶碗 2点
- ・ 加藤様 (東京都) リカンベント 1台

自転車文化センターでは、寄贈された貴重な資料を大切に保管し、特別展示等を通じてご覧いただける機会を設けております。

科学技術館入館チケット(招待券)プレゼント!

科学技術館(千代田区北の丸公園)「2F 自転車広場」には、当センター所蔵の歴史的自転車などの常設展示を引き続き行っております。ぜひお立ち寄りください。

♡友の会会員の方に科学技術館入館チケット(招待券)を先着10名様(お一人様2枚まで)に差し上げます。
自転車文化センター(目黒)に来館のうえ、インフォメーションカウンターまで、お申し出ください。

新刊図書のご案内

- 「女性のためのサイクリングガイド」おしゃれでカッコいい自転車のライフスタイル (キャシー・バッセイ・太田直子(翻訳) / ガイアブックス)
- 「バングラディッシュ」わんぱくアシフと青い自転車 (石川直樹 / 偕成社)
- 「BSM 万能クロスバイク最新バイヤーズガイド 2014 Vol.8」(笠倉出版)
- 「素晴らしき自転車ライフ」(クリス・ハンド・リンドン・マクニール / ニ見書房)
- 「クロスバイク Style 絶対に後悔しない購入完全ガイド」(コスミック出版)
- 「MTB 日和 出かけるのが楽しくなっちゃう!みんなの「山食」スナップ!vol.18」(辰巳出版)
- 「MTB 日和 MTB 好きの MTB 好きによる MTB 好きのためのフィールド満喫 vol.19」(辰巳出版)
- 「自転車日和 vol.32 使い方無限大!毎日が楽しくなる『春の自転車あそび』2014」(辰巳出版)
- 「弱虫ペダル」33巻 (渡辺航 / 秋田書店)
- 「MOUNTAIN BIKE ACTION」Vol.29-5.6.7

「BCC友の会」会員募集中♪

自転車に関する書籍など、約9000冊を所蔵しています。会員登録をいただいた方に限り、図書の自由閲覧をすることができます。会員各位におかれては、ご友人様などご紹介頂けたら幸いです。

【休館日】

月曜休館(祝日は開館し、翌平日が休館となります)

8月 4日、11日、18日、25日
9月 1日、8日、16日(火)、22日、29日

明治期の子どもと自転車 あれこれ

BCC学芸員 谷田貝一男

子ども用自転車（三輪車）は子どもが利用することから破損が多く、また使用期間も短いなどの理由から大半は処分され、後の年代まで残るということは非常に少ないのが実情です。加えて、100年前の明治期になりますと、子ども（10代の青少年を含む）たちがどのような自転車（三輪車）に乗り、どのように利用していたかという情報も極めて少ない状況です。

その中で、どのように自転車を利用していたか、どのような自転車が販売されていたかを紹介します。

[子どもの遊びと貸し自転車]

明治期の子どもたちはどんな遊びをしていたのか、主なものを室外での遊びと室内での遊びに分けて列記してみました。

室外での遊び

コマ、メンコ、竹馬、根ツ木（30～45cmの長さの棒切れの細い方の先端を尖らせて、土の中に打ち込む）、輪回し（太い鉄の針金でできた輪を回す）、ままごと遊び、鬼ごっこ、まり投げ、水鉄砲、縄跳び、豆鉄砲

室内での遊び

千代紙、影絵、着せ替え、草草紙（くさぞうし 主に絵入りの童話本）、おはじき、かるた、幻燈（明治27～28年ころに製造され、業者だけでも東京で十数軒あった）、セルロイドのおもちゃ、ぜんまいのおもちゃ、お手玉

では自転車を使った遊びはいつ頃から始まったのでしょうか。明治5年に大阪府が「自転車に乗り、戯れて橋の上や街中を数百mに渡って何回も往復し、通行人を妨害する者には、その自転車を取り上げる」という取締綱令を制定したことは、自転車を使った遊びがこの頃にはすでに行われていたことを示しています。同じく5年に、横浜元町の沼田某が木製のミシヨ一型自転車（前輪にペダルが付いている自転車）3台を製作して貸し自転車を営み、自らこの自転車で東京横浜間を6時間かけて走行したという記録があります。また「花の都女新聞」9年3月9日号では「下谷広小路の山本という水茶屋にて三輪の自転車を貸していますが、広小路を一返乗回す賃は1銭5厘だと申します」という記事が掲載されています。さらに10年横浜元町の石川孫右衛門が16台をアメリカから輸入し、1時間25銭で貸し出したところ、生糸商人や丁稚・番頭などが借りに来て、自転車が不足になるほど繁盛しました。12年の「芸術叢誌」第31号には「神田佐久間町秋葉ヶ原へ、三ッ車の自転車を5両程持ち出し、10分ばかりの時間を2銭で貸すというので、丁稚らが休み時に競って乗り回し、わずかの間に意外の利益を得ました」という記事が掲載されています。

こうした貸し自転車業は、各地の大きな都市を中心に盛衰を繰り返し、20年頃まで続きました。現在、特別展「子ども用自転車の歴史展」で展示している「鍛冶職人が手がけた明治初期の国産子ども用自転車」（写真1）は、この頃の貸し出し用として製作されたものです。

その一方で、自転車に夢中になり過ぎた子どもも少なくはなかったようです。18年に京都府は「自転車が通行人の妨げとなり、怪我をさせることもあり、学生は自転車に夢中になり勉強がおろそかになっている」ということで自転車の使用を禁止させました。また東京朝日新聞の27年4月26日号には、「日本橋蛸殻町から神田小川町界限にかけて子どもや中小僧などに自転車の乗り回しが盛んに流行している。夜間などは通行の邪魔にもなり、子どもは夢中になりまわり大変危険である。」という記事が掲載されています。



写真1 明治10年頃の国産子ども用自転車

[小林作太郎]

東芝の前身である芝浦製作所の職工で後に常務取締役となった小林作太郎は、自転車の曲乗り師としてもその名が知られ、明治31年11月6日に上野不忍池畔で開催された内外連合自転車競走運動会でも、その技を披露しています。作太郎は2年9月23日、長崎市西濱町で三男一女の長男として生まれました。父の彌吉は骨董店を営み、その傍らで彫金や刀剣の鑑定も行っていました。その影響もあってか、作太郎は生来機械好きで、玩具類の製作に夢中でした。その最初の作品が12歳のときの陸用蒸気機関の模型でした。真鍮製油脂の不要なものを材料として作ったもので、少量の加熱で動くものでした。これを作るにあたって、材料は小遣いを貯め、製作方法は市内の鍛冶屋、鋳物屋などに行っては機械の運転を手伝ったりして覚えました。翌年には楕円形の軌道上を走る長さ13.6cmの汽車の模型を、15歳のときには長さ70cm、幅18cmの汽艇の模型を作り上げています。

ところが父の彌吉は14年頃から胃腸病のため床に就くこととなり、17年5月他界しました。このため汽艇の模型を作り上げた後、作太郎は母アサ子、弟、妹とともに、長崎市上諏訪町にある叔父の本田家に引き取られました。この頃から作太郎の自転車乗りの練習が始まったのです。機械好きの作太郎が貸し自転車屋の店頭で並んでいる自転車に目をつけないはずはなかったのです。

作太郎自身の話によると、自転車に乗り出したのは18年か19年頃、すなわち16歳か17歳のときでした。その自転車とは前輪が大きく後輪が小さいオーディナリー型（当時の日本ではだるま型と呼んでいた）で、誰でも簡単に乗れるものではなかったのです。しかし、作太郎は本田家と18mほど離れた所に住んでいた年下の小森正三郎と互いに誘い合わせて、暇を見つけては毎日貸し自転車屋に出かけて1時間25銭で借り、2週間あまりでようやく乗れるようになりました。長崎市内の道路は高低差が大きいのですが、コースを変えて乗り回していました。特に反り橋（橋が曲線形で、中央部が両端部より高くなっている）では当時自転車で乗り越えることができる者は他にはいなかったもので、2人とも大層自慢で、互いに競争して乗り越えていました。

ある日、遠乗りをしようと思って、1里半の距離にある道野というところに向かったのですが、疲労のため結局途中で引き返すことにしました。出島まで引き返してくると、太鼓の形をした非常に高い橋がありました。その橋は自転車では誰も登ることができないほどの高さです。しかしこれを作太郎は一気に登りきったのです。ところが、高いだけあって下りは急坂であり、しかも正面が行き止まりの丁字路になっているため、下りきった瞬間に左右のいずれかに急転回する必要があります。しかしオーディナリー型自転車は急にハンドルを左右に振ることは、バランスをとるためには容易ではありません。ハンドル操作がうまくいかず、板塀に激しくぶつかってしまい、さらに板塀を突き破って前輪が塀の中へ突っ込んでしまったのです。その瞬間作太郎の体は板塀の上を乗り越えて、地面に叩き付けられ、座骨に大きな負傷をし、向脛も傷ついてしまいました。両親から大きな説教となり、作太郎は自転車に乗る事を一時止めたのです。

[宮武外骨]

ジャーナリスト、作家、風俗研究者として明治、大正、昭和を通して活躍した宮武外骨は、慶應3年1月18日、讃岐国阿野郡羽床村小野の豪農で、土地の庄屋を務めていた吉太郎の四男三女の四男として生まれました。幼名は亀四郎で、17歳の時に戸籍上の名を外骨に改名しました。12歳で高松の栄義塾の寄宿生となり漢学を学び、14歳の時に郷里滝宮の7歳年上の友人である竹内卯八と共に上京し、本郷元町にあった橘香塾に入り、2年間を過ごしました。明治16年16歳の初夏に故郷の讃岐に戻り、高松西新町に「磊々社（らいらいしゃ）」を設立して、「何求（かきゅう）新誌」という雑誌を発行するという理由で、父から300円を出資してもらいました。

ところが外骨はその大金を前にして、東京で見た自転車が眼前にちらつき始めたのです。生来好

奇心が強く、新奇好みの外骨は欲しいものはなんでもすぐに手に入れなければ気のすまない性格でしたので、もらった300円を懐中にすぐさま自転車を探して上京したのです。東京横浜を探しましたが1台もなく、大阪まで足を伸ばし、川口居留地を尋ねてみましたがやはり見つかりませんでした。ようやく神戸でイギリス人のダラム商会で古物を見つけて、170ドル（日本円で192円）で買ったのです。自転車はゴム付の三輪車で、前輪が直径60cmの2輪、後輪が直径1.2mの1輪でした（写真2）。そして讃岐の高松へ持って帰り、和服姿で白足袋をはき、頭にはトルコ帽のようなものをかぶり、毎日のように高松市内を乗り回したのです。その姿を見た人々は好奇と羨望の眼で眺めながらも、陰では「日本一のアホ者」と嘲笑したのですが、外骨はそんな声にはまったく無頓着でした。この自転車もやがて車輪のゴムが切れてしまったのですが、修理する店もなく、やむなく再び神戸の居留地に持ち込み、交渉の末80円で引き取ってもらいました。

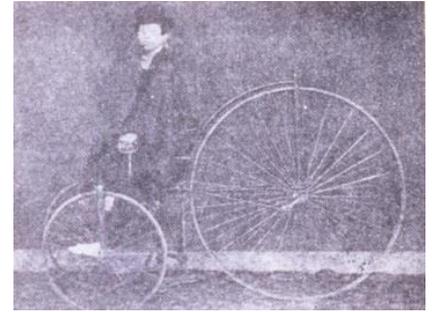


写真2 自転車に乗る宮武外骨

自転車の夢破れて、郷里の滝宮に帰った外骨は、新聞・雑誌への投稿を趣味として毎日を過ごしました。

〔女学生〕

明治28年8月2日午後5時頃、南豊島郡角筈村の往来を西の方から18～19歳の一人の令嬢が華やかな更紗の洋服を着て、自転車に軽々と乗り、熱砂の中をゴム入の両輪をすらすらと音もなく滑らせ、風を切るようにしてこちらへ向かってきました。裾が風で時々ひるがえり、脚に絡みついている様子を道行く人々はしばらく足を止めて、誰しもが茫然と首をひねって後ろ姿を眺め、その巧妙な乗り方を称賛しました。しかしお嬢さんはその声に耳を傾けず、見向きもせずこれ見よがしに腰をひねり、体を揺るがし、両手をハンドルにつかまり、時々鳴すベルの音だけが鳴り響いていました。

そんなとき、お嬢さんが進んでいるのと反対の方向から一人の百姓が、薪を積んだ荷馬車を悠々と引いて近づいてきました。お嬢さんは左に避けようか右に避けようかと考えながら、ベルをリンリンと打鳴らしてその横合を切抜けようと思いました。その瞬間、田舎馬の悲しさで、馴れぬ物音に驚いて「ヒン」と一躍飛上ってしまったため、荷車は横転し、積んでいた薪が落下してきました。その薪がすぐ横を通過していたお嬢さんの上に転げ落ち、「アハヤ」と云う間もなく見事に自転車は脇の溝の穴にころげ落ちてしまいました。哀れにもお嬢さんは真逆様になり、左の足と腰の骨を打ち、立つことも動くこともできずに悶え苦しんでいました。

ちょうどそのとき、通行中の巡査がお嬢さんを助けて、直ちに名倉出張所に連れて行き、厚く治療を加えた後、自宅まで送って行きました。自宅は麴町区富士見町1丁目で名は篠崎たか子（18歳）でした。なんとも男勝りの令嬢ですが、流行に遅れまいという心掛で、自転車に乗る練習をしばらく招魂社の馬場で行っていたのです。その成果を試みようとしてこの日、十二社の滝に乗初りしたのですが、無残な花の姿と泥まみれになってしまったのです。

〔少年レーサー〕

明治31年11月6日、上野不忍池畔にて開催された内外連合自転車競走運動会は万国旗がはためく中、レース参加者は外国人も含めて総勢500名、観覧席は満員札止めの盛況下で開催されました。その最初のレースは、1マイルの子ども競走（写真3）で、9名が参加し、優勝は岩谷吉三で景品は自転車用ガスランプ、2着は岩谷竹次で景品は洋傘、3着は大倉喜七郎で景品は靴でした。因みに大人競走1マイルも景品は同じでしたが、選手競走1マイルでは優勝が金牌、2着がアルバム、3着がセーターでした。

その後、全国各地で自転車競走会が開催され、子どもレースも併せて実施されていたところも多くありました。例えば35年8月23日に開催された秋田輪友会競走会の特別選手競走では、優勝した15歳の野口徳太郎に東京双輪商会からデートン号自転車（価格は10円）が、また5周競走では優勝した16歳の鈴木富治に横浜石川商会からピアス号自転車（価格は10円）がそれぞれ贈られました。

同じ35年10月27日に千葉県茂原町で開催された南総輪友会大競走会の第6レースは半マイルの子ども競走で、10歳の行川武、7歳の勇兄弟がそれぞれ2着、優勝しています。二人は上野不忍池畔でのレースなど各地のレースにも度々参加し、優勝しています。その後二人は自転車店を営み、併せて武は曲乗りも行っていました（写真4）。



写真3 内外連合自転車競走運動会の子ども競走



写真4 明治42年に開催された千葉県自転車競走会で優勝した17歳の行川武

[子どもの自転車利用の是非]

明治31年6月1日、自転車に対する本格的な取締規則が警視庁令第20号として全7条が警視庁から布達されましたが、その第6条に「12歳未満の者は道路で自転車に乗ってはいけない」という条文が入っていました。それでは幼児用の三輪車はこの自転車に含まれるのかということです。「自転車」という言葉が初めて使われたのは、3年に竹内寅次郎が東京府に自転車の製造販売の許可を出願した際の文書の中です。その自転車は三輪でした。その後の自転車が描かれた錦絵を見ると、14年の4代国政による「流行くるまづくし」、15年の2代国輝による「東京高輪往来車尽行合之図」は自転車と表記されているものの、描かれているのは三輪車ですが、幼児用三輪車とは形態・大きさは異なります。40年近くになると幼児用が三輪車の名称で輸入並びに製作が行なわれていますが、それまでの自転車という名称の使われ方や、条文制定の背景を考えると、12歳未満であれば三輪車も道路での使用は不可であったであろうと考えられます。

ところで、35年の「輪友」第11号で、「子どもの遊戯品として自転車はいかかなるものであろうか、経験のある方に問う」という質問があり、翌第12号で「自転車は子どもの遊戯品としても戸外運動を促進させて最も利益があり、且つ未だ危害を生じたる例もなく、また疾病等を起こした例もない」と回答しています。その一方で、36年の「輪友」で医学博士入澤達吉は「子どもが自転車に乗ることは骨の炎症を起こしやすいから過度に乗らせないほうがよい。何歳から乗らせるか」といって、満12～13歳位からは適度に乗らせるのがよいということになっている」と述べています。

[子ども用自転車・三輪車のカタログ]

カタログの中から、子ども用自転車が掲載されているものを、類似形式の大人用自転車と合わせて紹介します。比較して見ると、当時の子ども用自転車の位置づけがわかってきます。

1904年 (明治37年) MIAMI CYCLE (角自転車商会発行)



鬘晚峯子供用自転車 16・18吋
16吋：55円 18吋：65円

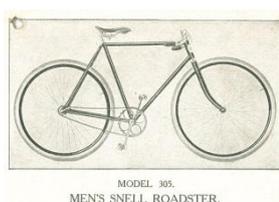


鬘晚峯 22吋
89円

1905年 (明治38年) SNELL BICYCLE



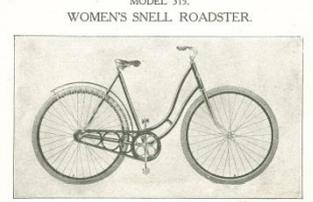
少年用 15・16・18吋



男性用 22・24・26吋

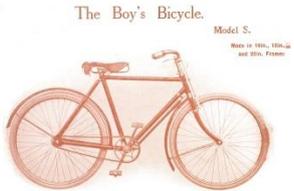


少女用 16・18・20吋

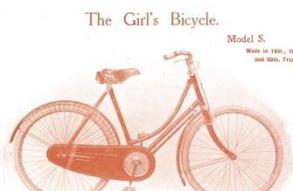


女性用 20・22吋

1906年 (明治39年) CYCLE CONSTRUCTION



少年用 16・18・20吋



少女用 16・18・20吋

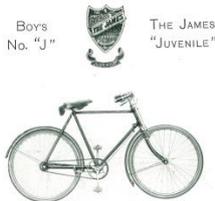


女性用 22・24・26吋

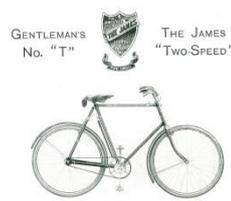


女性用 22・24・26吋

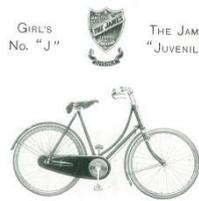
1907年 (明治40年) JAMES CYCLE



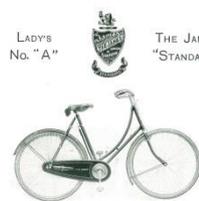
少年用 16・18・20吋



男性用 22・24・26吋



少女用 16・18・20吋



女性用 22・24吋

1908年 (明治41年) Humber Cycle



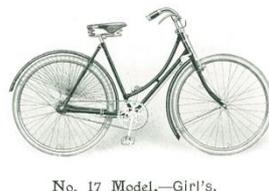
No. 16 Model.—Boy's,

少年用 16・18吋



No. 12 Model.

男性用 22・24・26吋



No. 17 Model.—Girl's.

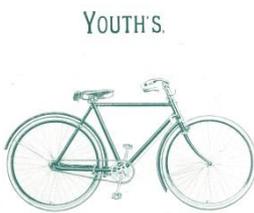
少女用 16・18吋



No. 5 Model.

女性用 22・24・26吋

1909年 (明治42年) STAR CYCLE



少年用 18・20吋



男性用 23・25・27吋



少女用 18・20吋



女性用 21・23・25吋

1909年(明治42年) Centaur Cycle



少年用16・18・20吋



男性用22・24・26・28吋



少女用16・18吋



女性用22・24・26吋

深田松之助(大阪市の問屋)

1907年(明治40年)頃



輸入品	大形：8円	中形：7円	小形：6円
国産品	中形上：4円90銭	中形並：4円	
	小形上：4円	小形並：3円2銭	

(参考文献)

- 「明治期における子どものあそび生活」 蛭田道春 大正大学研究紀要 第98号 2012年
- 「100年史にみる子どもの遊びと玩具」 安藤重雄 足利市立教育研究所 1971年
- 「大阪府警察史 第1巻」 大阪府警察本部 1970年
- 「自転車の文化史」 佐野裕二 文一総合出版 1985年
- 「日本立憲政党新聞」 明治18年4月10号 1885年
- 「小林作太郎傳」 木村安一 東京芝浦電気 1939年
- 「輪友」 第7号 輪友社 1902年
- 「宮武外骨」 吉野孝雄 河出書房新社 1980年
- 「明治奇聞」 宮武外骨 河出書房新社 2010年
- 「読売新聞」 明治27年8月4日 1894年
- 「風俗画報」 第178号 東陽堂 1898年
- 「日本における自転車の製造・販売の始め 竹内寅次郎の事績について」 齊藤俊彦 交通史研究 第13号 1985年
- 「輪友」 第12号 輪友社 1902年
- 「輪友」 第11号 輪友社 1902年
- 「輪友」 第12号 輪友社 1902年
- 「輪友」 第17号 輪友社 1903年

写真4は行川武氏の孫に当たります行川誠氏から提供されてものです。この紙面をお借りして御礼申し上げます。

「偽りのサイクル」 ジュリエット・マカー (小島修 訳) 洋泉社 2400円+税

ランス・アームストロングに関する書籍は多数ありますが、その中でも代表的な「ただマイヨ・ジョーヌのためでなく」(ランス・アームストロング 安次嶺佳子訳)を読むと、ガンを克服した屈強の男・最強のレーサーと思い、本書を読むと偽善の男・堕ちた英雄と思うのです。関係者へのインタビュー・裁判傍聴等膨大な記録を基に、いかにドーピングを隠し続けていたかが克明に記されています。登場するレーサーの9割以上がドーピングに手を染めている実態が明かされ、本書の題名の通り、グランツールがすべて偽りのサイクルレースとってしまう怖さが残ってしまったのが残念です。

「敗北のない競技」 土井雪広 東京書籍 1500円+税

土井氏の選手としての日々の様子を綴った日記ともいえるものです。シマノレーシングから世界へ飛び出し、ブエルタ・ア・エスパーニャに日本人として初めて出場するまでの、レーサーとしての成長のようす・チームとしての仲間たち、全日本選手権優勝をめざしての葛藤と勝利したときのおかんの気持などが素直に語られています。

現在はチーム右京に所属していますが、本書を読んだ後はなぜか土井選手を応援してしまうのは、レースへの真摯な取り組みとその人柄ではないでしょうか。

「サヴァイヴ」 近藤史恵 新潮文庫 550円+税

自転車ロードレースを題材とした近藤氏の著作は3冊あります。ツアー・オブ・ジャパン(本文中ではツアー・オブ・ジャポンとなっている)を舞台とした「サクリフェイス」、ツール・ド・フランスを舞台とした「エデン」、この2つの話の中に登場した人物に焦点を当てて、その秘話を語った「サヴァイヴ」です。単行本として出版された後、「サクリフェイス」と「エデン」は文庫化されていましたが、「サヴァイヴ」がようやく文庫されました。

3冊とも、誰が読んでも自転車レースというスポーツの魅力が伝わってきます。

「自転車で1日500km走る技術」 田村浩 実業之日本社 1600円+税

1日に20~30kmくらいしか走っていない人には、1日に500kmも走れるわけがないと思って本書を読むと、走れるかもしれないと思ってしまう不思議な本です。

著者の田村氏は雑誌の編集長という多忙のなかでも、時間を見つけては鉄道を活用しながら自転車で全国をまわっている経験から、この本が誕生したともいえます。まさしく本文中に書かれている通り「長距離サイクリングを可能にするのは、スキル(能力)よりもノウハウ(経験)であり、非体育系の少々ずるい(?)アプローチで、長距離サイクリングに役立つ情報をまとめた」のが本書であるといえます。

「人力車の研究」 斎藤俊彦 三樹書房 3800円+税

1979年に刊行された「人力車」の完全復刻盤です。日本の自転車の歴史、交通事故の発生とその原因・対策の歴史の中で、人力車の存在が大きく影響しています。したがってこうした歴史をたどる上で、人力車の誕生・発展・衰退の流れを知っておく必要があります。

著者の史料収集力とその解読力の素晴らしさの結果によって、人力車のすべてが網羅された書籍であり、これ以外の新しい情報が出てくることは今後もないと思われまふ。したがって初版が発行されてから35年経過しても、復刻版が発売された理由がそこにあるといえます。

「東京のれきし 道路・鉄道、まちづくり編」 双葉社 1300円+税

江戸に幕府が置かれてから約500年、その間に行われた道路整備計画と鉄道の発展から見た東京のまちづくりの歴史を、写真を主体にして構成されている歴史書です。

特に明治以降の各時代における道路状況が非常によくわかります。また後藤新平の関東大震災復興計画に込められた近代都市東京が実現していれば、公共交通としての自転車の走行空間も確立していたこと、その後の大幅な計画縮小のなかでも、現在のまちづくりに大きく貢献している箇所もあることなども併せて分かることができる本です。

BCC学芸員 谷田貝一男

こんな幼児用自転車もあります

ドレミー3DX ブリヂストンサイクル 1970年前後（昭和40年代）

ハンドルを握るとパイロット気分になる自転車です。前面のフードは飛行機の先頭をイメージし、ハンドルの間にあるのがレーダーで、左にあるボタンを押すとフードに付いているライトが輝きます。



マイクロハリー アラヤ 1982年頃（昭和57年頃）

12インチ、重量8.6kgの「極小、ロードレーサータイプホビーサイクル」とカタログに書かれています。

フレームはクロモリで、フロントバッグはオプションです。定価39800円

